

# 志向的对象抜き志向性のオントロジー

初期フッサールと R. M. チザム

植村 玄輝\*

ブレントラーノ学派や（初期）フッサールおよびミュンヘン・ゲッチンゲン学派を中心とした、世紀転換期の中央ヨーロッパにおける哲学の一潮流（「(広義での) 初期現象学」）が、現代におけるオントロジー（以下、「存在論」）ないし形而上学の復権の先駆の一つであったということは、もはや哲学史上の通説になりつつあるといっても差し支えないかもしれない。その一方で、「現象学」——ただし、「phenomenology」というよりは「Phänomenologie」——というこで、志向性概念（それがどのようなものであれ）を鍵にした心ないし意識についての探究を思い浮かべるのが、ふつうであるように思われる。「初期」という限定がされたとしても、こうした事情は同様だろう。

初期現象学についてのこれら二つの描像は、どちらも正しい。しかしそうすると、はたしてそれらは一つの描像へと収斂するのか、ということがとうぜん問題になる。存在論的探究としての初期現象学と、志向性の哲学（「志向性理論」）としての初期現象学には、本質的なつながりがあるのだろうか。

本発表の目的の一つは、こうした疑問に一定の回答を与えることである。初期現象学の志向性理論において、存在論的な道具立ては、場合によっては明示的にされていないかもしれないが、中心的な役割を演じていた。つまり、初期現象学の志向性理論は、志向性の存在論として解釈することを許容する。われわれは、初期現象学における志向性をめぐる議論のいくつかを再構成することで、この点を際立たせたい。

志向性に対して存在論的なアプローチをとるときにまず問題になるのは、「志向的对象」の存在論的身分をめぐる問題である。志向性のとりあえずの特徴づけである、「対象への関係」や「について性 aboutness」を額面通りに受け取るならば、われわれは、志向性を志向的態度と何かのあいだに成り立つ関係として考えなければならない。志向的对象とは、この何かのことである。だが、われわれは存在しないものについて考えることでも

---

\* 慶應義塾大学大学院文学研究科哲学・倫理学専攻（哲学分野）後期博士課程。sachverhalt@gmail.com

き、そうした思考も志向的であることには変わらない。すると、そのとき思考が関係しているはずの志向的对象は、どのような存在論的身分を持つのだろうか。

こうしたいかにもややこしそうな問題に直面したとき、われわれが取りうる態度の一つは、志向性が持っているように見える関係的性格を、見かけ上のものとして否定するというものである。この方針を持つ立場として、志向性の「副詞説 adverbial theory」がある。副詞説の基本方針は、たとえば太郎の志向的態度\*1についての文、

(1) 太郎は現在の日本国大統領を尊敬している

を

(1') 太郎は 現在の日本国大統領に 尊敬している\*2

にパラフレーズし、太郎の思考が関係している志向的对象（「現在の日本国大統領」）へのコミットメントを見かけ上のものとして消去するというものである。

パラフレーズの一般的な規則を問題なく示すことによって、副詞説は、志向的对象の不要さを示すことができるかもしれない。だが、副詞説がそこにとどまるだけの立場だとしたら、志向性の存在論としては少々舌足らずである。志向的作用がどのような構造をもった存在者なのかについては、副詞説はほとんど何も明らかにしていない。副詞説にしたがえば、(1) が真であるとき、何が存在するのか。あるいは、(1) が真であるとき、それを真にしている存在者は正確には何か。

この疑問に答え、副詞説を志向性の存在論として解釈・評価するために、われわれは、初期現象学における志向性理論を役立てることができる。すでに述べたように、初期現象学の志向性理論は、志向性の存在論という性格を持っている。そして、そういった理論の中には、志向的对象をなしで済ませようとする立場がいくつか存在するのである。本発表のもう一つの目的は、このような問題意識と関連している。われわれは、初期現象学の議論の検討を出発点として、志向的对象抜き志向性の存在論の諸相を概観したい。

具体的な検討の対象として、われわれは、初期（1900/01年の『論理学研究』前後の）フッサールと、1980年代後半以降のチザムの志向性理論をそれぞれ取り上げる。ただし、チザムの立場には、志向性の存在論としてはいささか不明瞭な点がある。これを解消するために、われわれは、ブレンターノ学派の一人トヴァルドフスキの議論を参照する。

---

\*1 われわれは、命題的でないような志向的態度が存在することを前提する。

\*2 「*N*に」（*N*は任意の名詞ないし名詞句）という下線つきの表現を、われわれは「*N*」を副詞化した表現と見なす。